



| | |
|------------------------|---|
| Title | 古典期前期マヤにおける国家形成の研究：三足円筒土器と「テオティワカンの影響」 [論文内容及び審査の要旨] |
| Author(s) | 今泉, 和也 |
| Citation | 北海道大学. 博士(文学) 甲第13395号 |
| Issue Date | 2019-03-25 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/74564 |
| Rights(URL) | https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/ |
| Type | theses (doctoral - abstract and summary of review) |
| Additional Information | There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL. |
| File Information | Kazuya_Imaizumi_abstract.pdf (論文内容の要旨) |



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名：今 泉 和 也

学位論文題名

古典期前期マヤにおける国家形成の研究
— 三足円筒土器と「テオティワカンの影響」 —

本論文の観点と方法 本論文は、西暦 250-600 年に相当する古典期前期のメソアメリカのマヤ地域における初期国家形成の問題を考古資料の分析によって考究するものである。

従来の碑文研究及び考古学の研究成果として、マヤ地域では先古典期後期から古典期初頭にかけての期間に都市国家が成立し、古典期前期は林立する都市国家がそれらの政治組織を発展・拡張する段階であると捉えられてきた。また、そのような古典期前期後半のマヤ地域に対して同時期の古代メキシコに存在したテオティワカン文明が政治的側面や文物の面で大きな影響を与えていたことが指摘されてきた。このような一連の現象は「テオティワカンの影響」として総称されている。碑文研究においては、西暦 378 年にマヤ中部低地のティカルでテオティワカンによる新たな政権が打ち建てられ、その後、異文化様式の文物がマヤ地域全域に広まってゆく現象が「テオティワカンの影響」として理解されてきた。本研究では、碑文研究によってリードされてきたマヤ地域における古典期前期の政治体制の問題を、初期国家形成の観点から、内発的な原初国家の成立（一次国家形成）と既存の国家体制による外的な影響のもとに国家化が進行する過程（二次国家形成）との関連のもとに、その全体を都市国家連合の形成過程として捉えなおすことによって、古典期前期におけるマヤ社会の実態を考究する。

「テオティワカンの影響」は具体的な文物にその痕跡を多くとどめている。それらはマヤ地域においてテオティワカン様式遺物・遺構として抽出することができるものであり、その種類によって社会的な価値が異なる。そのような分析対象として、遺物としては「三足円筒土器」「高台付き碗類」「土製蓋」「シアタータイプ土器」、遺構としては「タルー・タブレロ建築」が取り扱われる。本研究ではこれらのテオティワカン遺物・遺構の社会的な相対的価値差を明らかにして、マヤ地域内におけるそれらの出現・拡散・変容・消失の過程・度合を比較検討することによって、地域間あるいは都市間における社会的関係、すなわち都市国家の成立とその連合的形態の形成過程として再解釈する。

本論文の内容 本論文は三部から構成されている。Ⅰ部ではマヤ地域における国家形成の研究の問題点が整理され、考古学における国家形成の理論的モデルとの比較が行われる。また、古典期前期後半における「テオティワカンの影響」を初期国家形成の問題として捉えなおすことによって、本論文での分析対象を選定する根拠が提示される。Ⅱ部ではテオティワカン様式遺物の代表である三足円筒土器が分析される。本論文における中核をなす分析であり、初期国家形成期としての古典期前期におけるマヤ地域の具体的な様相が描き出される。Ⅲ部では三足円筒土器以外のテオティワカン様式遺物・遺構が分析され、Ⅱ部の三足円筒土器に対する分析で得られた結果が相対化され、結論として都市国家の成立とその連合的形態の実態が提示される。

序論では古代マヤ研究における個別的課題である「テオティワカンの影響」と総称される現象と、初期国家形成といった普遍的課題との関連を検討することのモチーフが提示され、

碑文研究によって提示されてきた歴史像を考古学研究によって検証し、重層的な研究を実施することの意義が確認される。

I部1章では、メソアメリカにおける古典期マヤ社会の所在と時代背景を確認し、研究史上の潮流の変化、碑文研究の進展、考古学研究の進展のそれぞれに対応して古典期マヤ社会の歴史像が変化してきたことを確認する。2章では、原初国家の定義と国家形成に関する理論について検討する。3章では、先古典期から古典期前期初頭にかけてのマヤ社会の様相を概観し、古典期前期初頭に原初国家としていち早く国家段階に至ったマヤ中部低地の都市、ティカルとカラクムルにおける国家形成の契機について検討する。4章では、内発的に国家形態に達する原初国家と、既存の国家の影響のもとに国家形態に移行する二次国家とについて、研究史を踏まえ、理論的に整理する。5章では、古代マヤ社会における初期国家形成を、先古典期後期から古典期初頭までの原初（一次）国家形成期と、古典期全体を通した二次国家形成期との二段階に分けて捉える。

II部1章では、「テオティワカンの影響」の実態を明らかにするために、各種のテオティワカン様式遺物・遺構が有する異なる性格について検討し、特に三足円筒土器の資料的有効性を確認する。2章では、三足円筒土器の分析に先立って、対象地域であるマヤ地域の範囲・地理的特徴を確認し、分析資料群の基礎データとして空間的分布傾向・時間的な広がり整理する。また、三足円筒土器を分析するための分類属性を決定する。3章では、器面調整・形態・装飾の分類属性にもとづいて、262点の三足円筒土器類資料を分類、71タイプを設定、それぞれのタイプの内容を記述する。4章では、三足円筒土器71タイプの空間的な広がり方について整理し、古典期前期及び古典期後期におけるマヤ小地域内の様式差について検討する。その結果、形態的特徴・器面調整技術・装飾技法の点でテオティワカンとの強い類似性を有するマヤ南部地域とオリジナルの三足円筒土器からの変異が大きいマヤ北部地域とを区分し、前者においてはテオティワカンからのヒトの直接的な移動があった可能性を提示する。5章では、マヤ地域における三足円筒土器の時間的な変化について検討する。三足円筒土器がマヤ地域でいかにして出現・変容・消失・残存して、古典期後期の土器様式に継承されるかが明らかにされる。

III部1章では、マヤ地域において古典期前期に新たな形式として作られるようになった高台付き碗類に関する「テオティワカンの影響」の実態を明らかにする。2章では、古代マヤ土器において一般的ではない土製の蓋、特に「精製土器に付随する蓋」に関して「テオティワカンの影響」との密接な関係を検討する。3章では、マヤ地域においては太平洋岸域と南部高地に分布が限定されるシアタータイプ土器と、その起源地とされるテオティワカン出土のシアタータイプ土器との比較検討を行い、両地域の関連と関係の強さを検証する。4章では、テオティワカンで成立した建築様式であるタルー・タブレロ建築を取り扱い、マヤ地域での分布・変容の度合を検討する。

結論では、以上の分析結果を総合して、古典期前期後半のマヤ地域における多くの都市の国家形態への移行（二次国家形成）は、北部地域にあっては内発的に達成された原初（一次）国家（ティカル、カラクムル）に誘発されたものであり、南部地域では外発的に（「テオティワカンの影響」により）達成された二次国家（カミナルフユ、モンターナ）によって周辺の都市が国家へと変貌したものであることを明らかにする。また原初国家であるティカルが、「マヤ化したテオティワカン様式遺物・遺構」をテオティワカンとの関係を象徴する「物質化したイデオロギー」として利用することによって、模範的国家儀礼を権力基盤として周辺諸都市を分散的に支配する「銀河系構造」の都市国家連合をかたちづくったことを論じる。